The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	平成の四半世紀を読み解く
Author(s)	吉川, 徹
Citation	ソシオロジ. 2013, 58(1), p. 115-118
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70063
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

●視点

平成の四半世紀を読み解く

吉川徹

社会調査データアーカイブが国内外で開設され、マルチレベル分析をはじめとする新しい分析技法が普及したことに促されて、調査計量の分野もビッグデータの二次分析（secondary analysis）の時代を迎えた。このように整った研究インフラは、大学院生や若い研究者にとっては「デフォルト環境」であることだろう。しかし、ほんの少し前の時代を知る私としては、データや方法の限界に突き当たることなく分析ができることが、とてもありがたいものに思われる。

この新しい流れに水を差すつもりはないのだが、より大きく複雑な構造をもつデータで、多くの社会の幅広い時代の、潜在的な構造の微細な有意性を確認するという分析スキルの競い合いだけが、この先の計量社会学が目指すべき方向性なのか？ということを考えることがある。というのも、わたしたちはデータ分析者であると同時に、今の時代の日本社会について語る社会学者であるべきだと思うからだ。そして私のような中堅世代の立ち位置のメリットは、戦後日本を語ったベテラン研究者が退いた後、ハイパーなデータ・ハンドリングをする若い研究者たちが現れるまでの間の日本社会を、調査データと実生活から複眼的に見知っているということだと思う。

ところで今年、平成が四半世紀の区切りを迎えた。元号の区切りがうまい具合に社会変動の区分とリンクするはずなどないことはわかっている。だが振り返ってみると、バブル経済をエピローグとするかのように、高度経済成長を主軸とした昭和後期という時代が終わり平成になったことは、確かに大きな契機だった。

他方、四半世紀というのは、ちょうど親子の一世代がめぐり始めるタイミングでもある。そう考えながらメディア報道をみると、政治の世界も芸能文化の世界も、かつてわたしたちに鮮烈な印象を残した「先代」たちが去り、二世たちへと代替わりしている。日々接している学生たちが平成生まれであることにもすっかり慣れた。

データの分析者として興味深いのは、四半世紀という時間が、時代の変化と、コーホートの入れ替わりと、個人のエイジング（家族役割や職業役割の遷移を含む）が渾然とあらわれるタイムスパンだということである。例えば社会意識をみ

るとき、その担い手が一巡すれば、その社会の主体性のあり方はガラリと一変するはずである。しかし、もしもその姿が維持されているとするならば、それは何らかの社会的な力によるということになる。それこそが日本社会が社会的事実としてもっている社会意識の特性に他ならない。

そんなことを考えながらこの四半世紀をみるとき、固有の課題としてさまざまなことが思い浮かぶ。例えば、二つの大震災を経験したこと、少子高齢化の進行、情報メディアの発展と変遷などである。計量社会意識論は、これらすべてに社会のソフトウェアとしての基礎情報を提供することをめざしている。

この分野のかつての主要課題は、伝統性と近代性の相克という時代の時間軸にかかわる論点と、一億総中流という階層の上下軸にかかわる論点であった。翻って現状をみたとき、この双方について、二〇世紀の近代の状態から再帰的近代といわれる状態に遷移していったことが、あらためて焦点とされるべきだということがわかる。

「近代から再帰的近代へ」ということは、わたしたちの世代が社会学を学んでくるなかで、奏でられ続けてきた現代の基調である。ただこれは、学説理論としては定着したものの、日本の社会意識について実証結果を示す研究は多くない。それは、この変化が前の時代の右肩上がりの単線的な量的変動と較べると微妙な、質の変容だからだろう。とりわけ潜在する社会意識の変容を描き出すのは容易なことではない。それでも、平成の四半世紀の間に、その変化があったことはまず間違いない。それはヨーロッパの学説に根拠づけられているからではなく、わたしたちの世代が肌で感じてきた変化であるからに他ならない。この変化を調査計量の数値データで示すには、最適なタイミング――わたしたちはまさに今、そこにいる。

というわけで私は、轟亮さん、前田忠彦さん、数土直紀さん、浜田宏さんなどの数理・計量・調査の分野の同世代の人たちとともに一昨年から科学研究費基盤研究（S）を得て、大規模な調査プロジェクトを始めた。それは社会階層と社会意識（Social Stratification and Sosial Psychology）という主題から、SSPプロジェクトと呼ばれている。総勢五〇名ほどが集まって分析や試行的な調査を始めたので、この共同研究者たちを私はSSP48と呼びたいのだが、義に駆り立てられる赤穂浪士のようでもある。

このプロジェクトが取り組んでいるのは、一億総中流、伝統-近代の考え方の筋道、保守-革新の政党構図など、昭和の終わりにだれもが関心をもち、新聞の一面さえも飾っていた日本の社会意識が、どのような経過で、曖昧模糊ととした現状に至ったのかを示すことである。

この四半世紀の社会意識あるいは階層意識の研究トレンドが、ごく大まかにいえば「明らかな図式が失われていく過程」

であることはすでに複数の研究で報告されている。だが、「うまく説明されない」という報告では説明にはなってはいない。

そこでわたしたちは二〇一五年に大規模な個別訪問面接調査である「第一回SSP調査」を実施することにしている。この調査は過去のSSM調査の意識項目を基準にして、社会意識の中長期変容を把握しようとするものである。この調査がうまく設計・実施されれば、計量社会意識論の重要な基準点となるだろう。

私個人についてみると、この一〇年は、昭和の終わりに先人によって実施された調査の「実り」をせっせと「刈り取る」研究を続けている。歴史の歯車として、良質な複合社会調査データセットを完成させて次代に提供し、後の洗練された二次分析に役立ててもらうという役回りにあるということかもしれない。

（きっかわ　とおる・大阪大学大学院人間科学研究科准教授）